

シリーズ1 フォルクローレ曲のコード付け②

フォルクローレコード付けは、①で解説した様に主3和音と代理コードで十分ですが、さらに、変化をつけたい時には、ダイアトニック（音階）コード以外のいくつかのコードを使用できます。

①セカンダリドミナントコード（仮の主和音に対するVのコード）

5～6小節目および9から10小節は、後ろのコード Dm を主和音 I として、それより4度下のコードを前に入れることができる。

A7 はキー Am では存在しないが、使用できることになる。

Am → A7 → Dm 元は Am → Dm で Am の半分を A7 に置き換える。

A7 (ラ) は Dm (レ) からみてレドシラで4度下

A7 → Dm は終止形でコードの繋がりが強い。(置き換えられるかどうかの判断は A7 のコード音が1音程度あれば使用できる)

灰色の瞳の一部

灰色の瞳

1 Am 2 Dm 3 G7 4 C 5 Am A7 6 Dm

7 E7 8 Am 9 Am A7 10 Dm 11 E7 12 Am

この規則に基づき次の様にコードを変化させることも可能である。

1 Am A7 2 Dm D7 3 G7 4 C E7 5 Am A7 6 Dm

7 E7 8 Am E7 9 Am A7 10 Dm 11 E7 12 Am

②ディミニッシュコード

ディミニッシュコードは調性を持たないコードで次の3種類です。さらに、表記は異なりますが4つが同じものです。使い方は、パッシングといわれる2つのコード間を滑ら

F#dim Gdim G#dim

Cdim
Adim
Ebdim

C#dim
Bdim
Edim

Ddim
Bdim
Fdim

かに繋ぐ役割のもの、また、部分転調の部分に使われる2つがあります。

◎パッシングといわれる使い方

上記 A7 の代わりにディミニッシュコードを使用できる。

ディミニッシュコードはキーの調性がないので、どんなキーでも使用できる。

使い方は、仮の主和音とした Dm に半音で繋がるディミニッシュコードを前に置くことができる。(A7 と C#dim は長3度の関係にある)

Am → A7 → Dm を Am → C#dim → Dm とする。

ディミニッシュコードは構成音から (C#dim=B b dim=Edim=Gdim) であり同じものを意味する。理論的には次の様に置き換えることもできる。

1 Am 2 C#dim 3 Dm 4 G7 5 C 6 G#dim 7 Am 8 C#dim 9 Dm

7 E7 8 Am 9 G#dim 10 Am 11 C#dim 12 Dm 13 E7 14 Am

◎部分的な転調のコードとしての使い方

そのキーにない音が、比較的長い音で出現した時に一時的に使う。

カンバの娘の一部であるが、4小節目にナチュラルファがメロディに出現している。ナチュラルファは、キー Em には存在しないし、Dm → E7 → Am は典型的なキー Am のコード進行であるので、4～5小節で Am に部分転調していると考えられる。このような場合にディミニッシュコードを使うこともできる。使い方は、ナチュラルファを含むディミニッシュコード G#dim に置き換える。

また、6小節目のレ#は B7 コードでも良いが、ここでは、Cm 転調としてコードを割り付けているので、レ# (ミ♭) を含む F#dim に置き換えることもできる。

カンバの娘

パッシング
Bmの半音下

Em → Am
転調

Am → Cm
転調

1 Em 2 Bbdim 3 Bm 4 Dm E7 5 Am 6 Cm 7 G F E7 8 Am 9

Em G F#7

G#dim F#dim

ついでに、2小節目の Bbdim はパッシングとして使われており、当てはめることのできる和音は、主三和音だと Em、代理和音で G、また、Bm に対するセカンダリードミノナントの F#7 などがある。